

# 「日本近代における遊廓の役割と娼妓の生活 : 福岡県久留米市桜町遊廓を例にして」

平川 知佳

## 論文要旨

本論文は、Ⅰ部「久留米市における遊廓の歴史」とⅡ部「娼妓の生活」の2部構成で、Ⅰ部は第1章～第3章、Ⅱ部は第4章～第6章とした。

まずⅠ部においては、明治期から昭和期にかけての社会の動きと関連づけながら、地方の一都市において遊廓がどのような役割を果たしていたのかについて明らかにした。そういった俯瞰的な観点をもつ一方で、桜町遊廓の内部にも目を向け、Ⅱ部においては、桜町遊廓を構成していたモノや人々といった遊廓のミクロな構成要素に着目し、遊廓独特の仕組みについて考察を深めるほか、久留米に存在していた遊廓において実際に使用されていた『娼妓所得金日記帳』をはじめとする一次史料の分析を行い、遊廓の中で働いていた娼妓がどのような生活を送っていたのかということについて考察を行った。そこから、近代期の久留米という地方都市において、遊廓という仕組みの中で、女性の性が具体的にどのように売買されていたのかということをも明らかにすることを試みた。この論文の特徴は、マクロ的な視点とミクロ的な視点の両方からアプローチを行うことで、近代期の久留米市における遊廓がどのようなものだったのかという点から、遊廓と娼妓の実態にせまることにある。以下、具体的な章立てである。

第1章では、久留米において近代公娼制がどのように確立されていくのかについて考察を行い、近代初期における公娼制の特徴について考察を行った。地方の一都市においても、遊廓の管理体制において、娼妓に対する性病検査の実施、経営者の組織化と警察による統制の強化がすすめられていたことがわかった。

第2章では、明治期における桜町遊廓の成立とその後の発展について、軍隊との関係から考察を行った。久留米においては、遊廓設置について反対論者が多かったにも関わらず、軍隊の設置が決まった途端、市内の町々が遊廓誘致に積極的になった。そこで、町々がなぜ遊廓誘致に積極的になったのかについて『福岡日日新聞』から考察を行った。激しい誘致合戦を経て誕生した桜町遊廓は久留米市が軍都としてのあゆみをすすめていくに伴って発展していく。これまでの研究においては、歴史の流れをもとに、久留米市の遊廓は軍隊の設置とともに誕生し発展していったという考察にとどまっていたが、実際に、『軍人娼妓所得金日記

帳』の記録、また『福岡日日新聞』にみる軍人と娼妓の心中事件の存在などから、軍人による利用を確認し、軍人が実際に遊廓を必要としていたといことを明らかにした。また『軍人娼妓所得金日記帳』の「千代鶴」の記録からは、軍人による遊廓利用が金銭的な面で優遇されていたのではないかという点を読みとった。

第3章では、まず昭和初期における公認遊廓の衰退に焦点をあて、なぜ公認遊廓が衰退していったのかについて考察を行った。世界恐慌のあおりを受け、先が見えない不況の中、人々の中には刹那的で享樂的な生活を求める者が増えた。そこで新たな享樂産業の1つとして確立されていくのが「特殊飲食店」であった。

「高級な遊び」としての側面もあった遊廓に対して、特殊飲食店は安価で気軽に遊べる場所として、中・下層階級の人々から人気を集め、発展を遂げていく。また特殊飲食店で働く酌婦の働き方も、娼妓に比べると「自由」であった。不況下、身体を売ることを決める女性は減らなかったが、そういった女性たちの間でも、その働き先として遊廓より特殊飲食店を選ぶようになった。公認遊廓の衰退の背景には特殊飲食店の隆盛があったのである。

次に、戦時下における遊廓の役割に注目した。戦争が烈しくなっていくにつれて、風俗営業は縮小されていく。しかし、国家精神総動員のもと遊廓や芸者街は営業が制限される一方で、特殊飲食店は、性病予防施設の設置や酌婦の健康診断の実施が行われ、遊廓的な場所として準公認化されていく。国は、戦局が悪化していく中、性病予防にさえ気をつければ男性の性の享樂は認めるという構造をそれまで以上に強固なかたちで作り上げたのである。

また、この章においては、戦時下の女性たちによる銃後活動にも着目した。銃後活動は婦人団体を中心に行われていたが、遊廓や特殊飲食店で働く女性たちの中にも銃後活動に従事する者がいた。久留米市の特殊飲食店で働く女性たちは、出征兵士のために500個の慰問袋を作成している。また「高級享樂停止に関する具体策要綱」によって職場を失った芸妓たちは、「産業戦士」として工場等で働くことがすすめられた。こうした女性たちによる銃後活動も、女性の気遣いや社会とのつながりを望む思いが利用され、それが結果的に戦争協力に力を貸してしまった例としてみつめることができるようにも思う。

第4章では、主に桜町遊廓の構成要素に焦点をあて、桜町遊廓がどのように成り立っていたのかについて考察を行った。まず廓内の建物や施設、遊廓をめぐる人々として娼妓、斡旋業者、経営者などに着目し、遊廓の成立と経営における特徴を明らかにした。そこでは、娼妓が斡旋業者によって集められ調査を受けて、

娼妓稼業をはじめるといふ流れと、実際の『娼妓稼業及ヒ債務弁済契約証書』をもとに、娼妓が経営者と結ぶ厳しい契約条件について考察を行った。ここで注目すべきは、桜町遊廓の経営者には、市会議員をはじめとする地元の有力者が多かったという点である。また経営にあたって久留米以外の地からやってきた者も多く、あらかじめ別の事業等で成功をおさめた人物たちによって経営がなされていた点も特徴として挙げられる。

第5章では、『娼妓所得金日記帳』をもとに桜町遊廓における娼妓の生活に焦点をあて、考察を行った。福寿楼で働いていた娼妓の出身地、開業時年齢、前借金額、稼業年数などに着目し、娼妓たちの稼業における傾向を明らかにした。また『娼妓所得金日記帳』における娼妓たちの日々の記録から、娼妓たちの生活を具体的に読み取り、娼妓たちの性がどのように売買されていたのかについて明らかにした。病に倒れ思うように働くことができなかつた娼妓もいれば、熱心に働き売り上げをあげることでできた娼妓もいた。しかし、そのどちらも前借金を返済することはできなかつた。このように実際の記録から見えてきたのは、肉体的にも金銭的にもとても苦しい娼妓たちの実態であった。その一方で、経営者側は娼妓を長く働かせ借金を重ねさせることによって、利子が増加するなど、得する一面もあつたことを付け加えておく。

第6章では、肉体的にも金銭的にも厳しい状況の中、自由廃業運動や待遇改善のストライキを起こした娼妓たちに焦点をあて、婦人の人身売買禁止に向けた世界的な動きや警察による遊廓の改善方針を味方にし、娼妓たちが「自由」を求めて動き出したことを明らかにした。しかし桜町遊廓においては、そういった動きは活発にならなかつた。桜町遊廓の場合は、経営者が強い権力をもって娼妓を管理しており、娼妓たちは動きたくても動くことができなかつたのではないかという考察を行った。